



Title	能の多人数合唱とその担い手 -演出史序説-
Author(s)	藤田, 隆則
Citation	大阪大学, 1996, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.11501/3118125">https://doi.org/10.11501/3118125</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 【 9 】

氏 名	ふじ 藤 田 隆 則
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 2 6 6 6 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 8 年 7 月 30 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第2項該当
学 位 論 文 名	能の多人数合唱とその担い手 —演出史序説—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 山口 修 (副査) 教 授 天野 文雄 助教授 永田 靖

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、音楽学を出発点として芸能史および演劇学にも踏み込んだ能楽研究である。日本の伝統芸能である能においては、ギリシャ悲劇におけるコロスにも似たかたちで、「地謡」と呼ばれる多人数の合唱（齊唱）が舞台演出上で大きな役割をはたしている。この事実は、先行研究において指摘されてはいたが、それがどのような歴史的展開の過程を経て現在見られるような上演形態をとるようになったのかという視点に立った研究は少なかった。この未開拓の主題領域に取り組み、一種の総合芸術としての能がたどったであろう演出の歴史を重要な一側面から大きく捉えるのが本論文である。

能の演出論であるからには、主役としてのシテや脇役としてのワキ等の役割に着目するのが常套手段であるとする立場はあり得る。しかし、多人数合唱のあり方がそれらの役柄の設定に影響を及ぼすことを考え合わせれば、むしろその周辺的な領域が「作品の解釈」という観客にとっての中心的な関心事に対しても重大な演出上の効果に違いをもたらすとみなすことができる。こうした問題設定が、本論に先立つ序章「能の演出研究における多人数合唱の位置」の第一節「演出研究と多人数合唱」でなされる。また、そこに提示された問題を解明してゆくために基本的に了解されるべき能楽の概略が、続く四節で簡潔に示される（「能の物語とあらすじ—類型の紹介」「舞台に出演する役者」「能の台本の実例—高砂の場合」「舞台展開」）。その際、能の演出論を展開するために必要な現行の用語を定義するにとどまらず、自らの実践と鑑賞の体験に裏付けられた記述が試みられている。そして、第六節「舞台展開と多人数合唱にかかる問題」において、ワキ、ワキツレ、シテツレ、シテ（前ジテおよび後ジテ）、「地謡」などの歌い手が、現行の上演形態ではどのように舞台上に配置されるか、あるいは移動するかを説明する。

本論は大きく二部から成り、それぞれ五章および四章に分けられている。第一部「多人数合唱」においては、多人数合唱を論じることの意義を明らかにした上で、世阿弥時代の史料を検討する。そして、第二部「多人数合唱の担い手」では、シテ、ワキ、ツレ、「地謡」などそれぞれの役の歴史的変遷をたどる。

第一章「歌を『本質』として能をみてみる—戯曲的側面の位置づけ」では、関連する先行研究の例として野上豊一郎による「能の主役一人主義」（1930）を真っ先に挙げ、能が本質的に演劇（戯曲）ではなく、むしろ仕方話、歌、舞

にこそ能の本質があるとする考え方には言及する。この考え方をさらに敷衍して、論者は「能の上演を演劇という枠組みでみるのではなく、歌の上演としてみる枠組み」を提示する。その根拠としては、多人数合唱のかたちをとる多くの箇所において、合唱の音頭をとるのがシテの役割となっているという事実である。シテは、劇中心物であるにとどまらず、一座の中の第一歌手として位置づけられており、能の上演において歌の芸がきわめて重要であると考えられるのである。この考え方によって曲を具体的に観察すると、合唱箇所と独唱箇所の配分方法に歴史的な変遷があったことが推定され、このような視点から演出史を追うことの必要性がみえてくる。

第二章「多人数合唱の文言のうけとりかた—『同音』は人物のことばか？」で論じられるポイントは、多人数合唱の文言（詞章）がシテやワキなどの登場人物のことばであるとみることが適切ではないということである。能楽史研究家の表章による近年の指摘によれば、謡本の中で多人数合唱の箇所に「同音」「地」の区別が記されているのは、それらがそれぞれシテの言うべき文言、ワキの言うべき文言であることを指示するものであるという。しかし、「同音」という用語自体は本来、近現代の一般的な音楽用語としての合唱に相当するものであったし、「地」はシテを除いた歌い手たちを指すものであったから、表説には無理があると論者は批判する。換言すれば、謡本に記されたこれらの用語が指示するのは誰のことばかではなく、どの歌い手たちがそこを歌うべきかということなのである。すなわち、「同音」は「その場の音頭取り（シテ）を含む複数の立ち役（および「地謡」）が歌う」べきであり、地は「その場の音頭取りを除いた複数の立ち役（および「地謡」）が歌う」べきことを示しているにすぎない。

近現代におけるこうした解釈の行き違いを整理するために、次の三章で歴史的な考察が施される。

第三章「世阿弥は『同音』という指示をだれに向けていたか？」では、能の大成期に活躍した世阿弥が書き残した能の台本を検討する。世阿弥は、多人数合唱を指示するために「同音」とだけ書いている。ここで問題となるのは、世阿弥が能の演出家として誰に向けてこの指示を書いたかということである。一方、世阿弥の伝書などから明らかなることは、世阿弥の時代にすでに現代の「地謡」に相当する多人数合唱の歌い手たちが舞台に登場していたということである。ただし、それらの人びとを指す統一的な名称もなく、人数も定められてはいなかった。したがって、世阿弥が「同音」というとき、舞台に扮装して登場しているシテやワキといった複数の立ち役にまずその指示を向けていたと考えられる。

第四章「世阿弥時代の多人数合唱の分類」では、どのような箇所が多人数合唱に関わるかを類型的に整理する。その結果、「同音」と記されていない箇所でも多人数合唱の形態をとっていた可能性があることが指摘できる。また、世阿弥が独唱であると規定している箇所でも、後世の演出では多人数合唱に変えられている場合もみられる。すなわち、独唱か多人数合唱かという個々の問題は、歴史的に変化してきたとみなさなければならない。世阿弥が「同音」と指示している箇所は、二つに分類できる。第一に、シテを含む複数の立ち役が歌うことになっている箇所、そして第二に、シテを除く複数の立ち役が歌うことになっている箇所である。世阿弥自身は「同音」と「地」の区別をおこなってはいないが、その区別の仕方につながる多人数合唱の使い分けが世阿弥の時代に存在していたと考えられるのである。

第五章「『同音』から『地』へ—呼称の変遷が意味するもの」で論じられるのは、室町期の後半以降にしばしば用いられるようになった「地」ということばの使い方とその変遷である。「地」は「地謡」の省略形であるかのように受け取られがちであるが、「地」ということばは「地謡」よりも古くから使われていたことが判明する。しかも、この言葉が意味するのは、シテ以外の歌い手をすべてひっくるめたものであったと考えてもよい。多人数合唱の箇所は、謡本上で「同音」と書かれていようと、あるいは「地」と書かれていようと、シテ以外の歌い手が声をそろえて音量豊かに歌う箇所であることに変わりはなく、シテ以外の歌い手の観点からすれば、いずれも自分たちが歌わなければならぬものであって、とりたてて区別する必要はない。そのために、「同音」と指示された箇所でも「地」と呼ぶことがあるようになったのである。室町時代末期には、「地謡」ということばも散見されるようになり、初めは多人数合唱の歌い手を指していた。そしてのちには、そういう歌い手たちが歌うことになっている箇所をも意味するようになった。ことばの指示対象が拡大したのは、「地謡」だけでなく、「地」もそうであった。

第二部第六章「『地謡』から『居座の歌い手』へとさかのぼる」の出発点は、「現代では必要不可欠の役割として登

場している『地謡』の衆が、かつて同じように認識されていたのか」という問い合わせである。この疑問を解明するための手がかりは、絵画資料などさまざまな資料から得られる。なぜなら、「地謡」の人数、服装、舞台上での位置、あるいは少なくとも「地謡」について人びとが共通にいだいているイメージなどがわかるであろうから。そこで、江戸時代初期まで絵図をさかのぼってみると、「地謡」が現代のように統率のとれた一役であるというイメージは薄れてゆく。人数も上演によってまちまちである。室町期の絵画資料とともにみると、その人数もきわめて少なくなり、現代のように必要不可欠とは考えられていなかったと仮説を立てることができる。

第七章「ワキは多人数合唱にどのようにかかわってきたか?」では、多人数合唱に深く関与してきたとされているワキがさまざまな歴史的段階でどの程度関与していたかを探る。江戸中期には、ワキは現代と同じように多人数合唱には加わっていなかった。しかし、それより少しさかのぼれば、多人数合唱のうち「地」を歌っていたことがわかる。室町末期までさかのぼれば、「同音」の箇所すら歌っていたのである。

第八章「ツレは多人数合唱にどのようにかかわってきたか?」では、シテやワキとともに登場するシテツレやワキツレなどの立ち役がかつてどのように舞台で演じていたかを検討する。ツレは、舞台上の必要性がなくなると退場することになっているが、現代の上演では退場しないこともある。史料をみると、ツレが舞台に残っている状況を多数確認できる。室町期には、「地謡」の人数は後世のように多数が確保されていたわけではなかった。したがって、ツレが多人数合唱に加わることは音量を大きなものに保つ意味で望ましいことであったにちがいない。

第九章「シテは多人数合唱にどのようにかかわってきたか?」では、シテに目を向ける。シテは「同音」を歌い通すのが原則ではあったであろうが、実際は異なる。シテが「同音」を歌わなければ、「地」との区別がなくなる。室町後期から江戸初期にかけて、ワキが「同音」の統率者として名乗りをあげている。そして、ワキもまたその役割から撤退し、現代にみられるような「同音」の統率者すなわち「地頭」が生まれた。シテやワキが統率者でなくなっていた背景には、聴覚的に効果をあげることのできる「地謡」が拡充していったことがあったのである。

総計168頁 本文130頁 (400字詰原稿用紙換算約690枚)

序文、文献一覧、図版、あとがき、要旨、大要、abstract (英文)、summary (英文) 計38頁

## 論文審査の結果の要旨

従来の音楽学は、大まかにいえば「歴史的音楽学」と「体系的音楽学」とに二分され、個人の研究者としてはいずれか一方に偏向するのが通例であった。ところが、音楽学が欧米のみならずアジアや他の地域でも盛んになるにつれ、この二分法が学問の進展にとっての大きな障害であることが意識されるようになってきた。しかも、単に音の問題を論議するにとどまらず、隣接する諸芸術の領域にも深く関連した、いわゆる学際的研究の必要性が叫ばれている。現在、とくに若手の音楽学者からそのような問題意識が強く示されており、しかも具体的な研究成果をともないつつある。本研究は、音楽学の分野でのそうした新しい動向を反映した典型例であると位置づけられる。

論者は、卒業論文や修士論文に取り組んでいたころは、能の実践を通じて現行の能という表演芸術 (performing arts) からみえてくる美学的・民族音楽学的な問題に焦点をあてた研究に没頭していた。しかし、上記のような音楽学内部での動向の変化に加えて、在籍していた大阪大学美学科の隣接諸講座からの刺激もあって、視野を広げる傾向が目立っていた。その傾向は、就職後さらにはっきりとしたものになり、その成果が本論文としてまとめたということになる。

具体的に本論文の特筆すべき点を挙げるなら、まず音楽学において現在最もホットな研究主題であって、それだけに説得力のある成果がまだ充分に公表されていない「表演慣習 (演奏慣習 Aufführungspraxis, performance practice)」に正面から取り組んだことである。この研究主題は、西洋のバロック様式の研究に典型的にみられるように、演奏上の装飾音などの音の問題としてのみ扱われる傾向が強かった反面、実際の演奏が成就される現場の脈絡が無視

されることが多かった。本研究は、その欠けていた側面を補うものとなっており、しかも音楽学のみならず、芸能史や演劇学の領域にも刺激的な成果をもたらしている。

歴史的研究としては、文字史料の適切かつ大胆な読みと解釈に加えて、図像資料をも視野に入れ、さらに現行の表演(performance)の状況や観客の動向さえも歴史的考証のための出発点として位置づけている。そして、こうした一連の「記された」資料およびフィールドワーク的観察から得られる「記されていない」データを有機的に関連づけながら読み解いてゆくために、能の実践に携わってきた体験と照らし合わせるというユニークな方法をとっている。

本研究には、さらに磨かれるべき問題点がないわけではない。たとえば、従来の表演慣習研究でなされてきたような、より音に直結した問題が充分に検討されているとはいえない。多人数合唱の音量の問題はある程度論じられているが、他の音楽的側面がどのように変遷してどのように演出効果と関わりをもったかといった問題意識が組み込まれていてもよかったです。また、ギリシャ悲劇のコロスと比較する件は若干あるとはいえ、通文化的な視野は欠如している。漢民族や朝鮮民族といった地理的にも文化的にも近いところにみられる類似現象はもとより、オペラやミュージカルでの合唱や重唱といった形態への通文化的比較の視座が組み込まれていたら、本研究はいっそうインパクトの強いものになっていたであろう。

こうした欠点はしかし、本論文全体の価値を大きく損なうものではない。これを出発点として、さらに高次の研究がなされることが期待される。本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位請求論文として充分に価値のあることを認定するものである。